北條時頼の道元禪師拜請の背景に就いて

兒玉達童

一

波多野義重の大佛寺寄進を受けて越前志比の庄に赴かれ、ひたすらに坐禪辨道、一個半個の說得に餘念あられなかつた道元禪師が、五年の後時の執權時頼の拜請に應じ突如新都鎌倉に赴かれ、半歲を此處の白衣舍に過された事件は、禪師の性格、家風、世系等の種々の角度から眺めて頗る興味ある問題を投げかける。殊に天龍寺義堂の日用工夫略集永德二年九月二十五日の頃に、「君（足利義滿）密話、及天下政事云、萬一有變、欲棄天下、當如永平長老勸平氏、余與大淸密贊、尉勞云、視世弊履、是乃安樂長久之基云々」の文あり、之を以て禪師此時時頼に大政の奉還を進言せられたものと解釋し、以て禪師の國體觀に論及せんとする試みもあり、夙に學者の注意する所となつて居る。余の此論文の目的は、禪師の此鎌倉飛錫の直接の動機を作つた時頼の時代の政治的背景を考察して其拜請の心事を推度するに幾分なりとも寄與したいといふに在る。又若し此目的を達成すれば、其達成の度に應じて、上述日工集の謎にも若干の光明が點ぜられようかと思ふ。

二

先づ結論的な觀察を先に言へば余は、時賴の禪師拜請の背景には多分に政治的な解釋を適當とする部分があるやうに思ふ。といふのは、丁度禪師が越前に赴かれた寛元々年を界線として鎌倉對京都の關係を中心にした政治的情勢には一大變化が生じて居る。其情勢變化の大きな波動が時賴をして久我家の出なる禪師を鎌倉に拜請せしむるに至つた原因の少くとも一つではあるまいかと推察されるからである。以下此事を明かにする爲に久我家を中心に置いて鎌倉幕府創立直後よりの鎌倉對京都間の政治的情勢の變化を略叙する。

禪師の父通親卿（以下敬稱を略す）は鎌倉幕府創立直後一時京都の反鎌倉派を代表する政治的人物であつたやうである。愚管抄には建久九年正月十一日の頃に「通親ハタト讓位ヲオコナヒテ、コノ刑部卿三位（藤範子）ガ腹ニ能圓ガ女ニテコノ承明門院オハシマス腹ニ王子ノ四ツニナラセ給フヲ踐祚シテ、コノ院（後鳥羽上皇）モ今ハヤウ〳〵意ニマカセナバヤト思シ召スニヨリテ、カク行ヒケリ。關東ノ賴朝ニハイタウタシカナルユルサレモナカリケルニヤ。賴朝モ手ニ餘リケル事カナトモヤ思ヒケン云々」とあり。其專斷的な行動の中に賴朝の勢威にも敢へて反抗するを辭しないと考へてゐるらしい反鎌倉的の態度と豪膽な性格がよく現はれて居る。しかも此の如き行動は此時に始つたのでない。其より三年前の建久七年、承明門院を入內せしめた時の經緯に既に現れて九條兼實はじめ親鎌倉派の人々を戰慄せしめて居る。之を讀史餘論は斯く記述して居る。（無論愚管抄にもでゝ居るが便宜上讀史餘論から引く）

「ハジメ兼實ガ長女入內シテ中宮タリシカド皇子誕生ナカリシカバ賴朝ノ女ヲ入內セシメントセラレキ。時ニ權大納言源通親帝（後鳥羽）ノ乳母三位ノ局藤範子ト通ジテ相謀リテ己ノ女ヲ入レシカバ、帝之ヲ愛シテ賴朝ノ女入內アランコトヲキラヒ給ヒシカバ、密カニ奏シテコノコトヲヤム。承仁法親王ハ帝ノ叔父ニテ帝ト睦ジク、日々ニ宮中ニ

入リテ丹後局榮子ト密通シ給フ。コノ丹後ノ局トイフハ、後白河法王ノ寵女トテアリシカバ、法王カクレ給ヒテモ中宮ノコトヲ專ラニシテ、播磨備前ノ國務ヲ領シテ新ニ大莊ヲ營ミシヲ兼實賴朝ト謀リテ之ヲ止メラル。サレバ兼實ヲ怨ミテ承仁、通親ト黨シケリ。帝遊宴ヲ好ミテ兼實ヲハバカリ給フヲ見テヒマニ乘ジテ之ヲ讒シ、進奏ノコト賴朝悅ビズト稱シテハ帝ノ心ヲオソレシメ、帝ヨロコビスト稱シテハ賴朝ニ告グ。兼實ガ上表ヲ悅ビ、其職ヲヤメ、(近衞)基通ヲススメテ之ニ代ラシメタリ。猶モ兼實ヲ流刑ニ申シススメシカド、ソノ罪ナケレバ帝ユルシ給ハズ。サレド其詐ヲバサトリ給ハズ。中宮モ、兼實ノ關白ヲヤメラレシカバ、宮中ヲ出デテ八條ノ院ニウツリ、僧正慈圓モ天台座主ヲヤメラレテ、承仁法親王ヲ以テ之ニ代フ。八年七月賴朝ノ女死ス。初メ兼實ノ奏ニヨリテ女御ノ宣アリシニ俄ニ兼實停職ヲキキテ遲滯ノ中ニ死シキ。賴朝詳ニ通親ガ謀ヲ聞イテ、『猶少女アリ、來年入洛シテ女御ニ備フベシ。且ツ攝關ヲカヘラレシコトソノ沙汰アルベシ』トイヒシカバ、人皆之ヲ懼ル」とあり。卽ち後鳥羽帝の女御を定むるに當つて兼實、賴朝と通親とは全く反對の立場に置かれたのである。されば賴朝の憤懣やる方なかりし處、更に前述の如く後鳥羽天皇讓位、土御門天皇踐祚の件あり、賴朝の怒は愈激しかつたが、翌正治元年賴朝は突如病み、此怒を發散せざるうちに薨じた。愚管抄には病中書を兼實に送つて「萬ノコト存ジノ外ニ候」と述べたと傳へて居る。

併し間もなく範子死し、承明門院退き、建仁二年には通親も亦「頓死」して、其後は大體に於いて親鎌倉派の九條兼實の一門が京都の勢力を代表することになつたらしい。上述の如く通親の辣腕に依つて彼は關白の職を退かせられ、近衞基通之に代つたが、其結果として攝關の職は右兩流(九條、近衞)交替に之に就任するの例が作られ子孫繁榮の因となつた。されば禪師の外祖父たりし松殿基房の如きは兼實の兄であつたが、其流は勢到底之に及ばなかつた。禪師の母歿後禪師を養ふて他日顯職に就かしめんと待望した基房の子師家の如きも此一門の頽勢を挽回せんとの

志尠少ならざるものがあつたのであらう。）中でも兼實の息後京極殿良經の妻は賴朝には姪に當る中納言能保の女なりしかば此流の勢は殊に大であつた。良經は通親薨去の年基通の後を受けて攝政となつた。併し通親以來の鎌倉反鎌倉二派の確執は猶も續いたらしく、始め權大納言藤宗賴の妻であつた範子の妹、卿三位兼子が宗賴死後、前太政大臣賴實の室となるや、此三位兼子と良經とは各己の女を（三位兼子は賴實の先妻藤隆子の女麗子を）東宮（順德）の女御とせんとて競爭した。後鳥羽上皇との關係に於いては良經の力も及ばぬものあつた如く、此競爭は兼子方の勝利に終つた。建永元年良經盜人の爲に死しゝも死因に浮說あり、此對立に關係ある如くにも傳へられる。

併し又同じ反鎌倉派に在つても夫々多少の立場の相違はあつたのであらう。承久元年實朝死しゝ後二位尼政子は二位局兼子との間に雅成、賴仁二皇弟の中一人を鎌倉の主となすべく約せしも、上皇には之を許されず、良經の子左大臣道家の季子賴經を將軍たらしむべく勅許があつたのである。此邊に、最初に述べた、後年の京都對鎌倉の情勢變化の機微が萠芽を發して居るのではないかと疑はれる。

斯くて承久の亂となつて三上皇の配流を見、帝位は仲恭、後堀河、四條と移つたが其間に獨り榮えて行つたのは道家一門である。其季子をして鎌倉將軍職に居らしむるのみならず、己れは承久三年以後近衞家實と攝關を交互にし、其女を後堀河に入れては、四條を生んで帝の外祖でもある。後攝政職を長子教實、婿兼經等に讓り、朝政を左右するの勢に在つた。

然るに仁治三年四條天皇崩ずるや、執權泰時は順德帝の御子忠成親王を排し、土御門帝の第二子御嵯峨天皇を立てた。之が寛元々年のことで、最初に言つて置いた京都對鎌倉間情勢變化のきつかけである。當時其が京都諸公家、殊に道家一門に與へた。衝擊の大なりしことは想到するに難くない。蓋し後嵯峨の母は通親の長子宰相中將通宗の女な

れば、之は元來道家一門とは對立の家柄である反鎌倉派の久我家への態度急變を意味するからである。承久の亂に於ける土御門上皇の穩和な見解、實朝歿後將軍選定に於ける二位局兼子の妥協的態度に既に遠因を發して居たらうとはいへ、此急變は、從來親鎌倉派を以て任じてゐたであらう道家にとつて靑天の霹靂であつたに違ひない。神皇正統記には「四條院俄ニ晏駕。皇胤モナシ。連枝ノ御子モマシマサズ。順德院ゾイマダ佐渡ニオハシマシケルガ御子達モアマタ都ニ止リ給ヒシ。入道攝政道家ノ大臣カノ御子ノ外家ニオハシシカバ、コノ御流ヲ天位ニツケ奉リ、モトノママ二世ヲシラント思ハレケルニヤ、ソノ趣ヲ仰セツカハシケレド、鎌倉ノ義時ガ子泰時ハカラヒ申シテコノ君（御嵯峨院）ヲ居エ奉リヌ」とあり、讀史餘論には「順德ノ母修明門院モ道家モ大ニ驚キシカド力及バズ」と記して居る。

三

以後の史實は何れも道家一門と鎌倉との乖離、而して其と正反對に久我一門と鎌倉との接近を示して居る。寬元二年賴經は將軍職を其子賴嗣に讓り、越えて四年歸洛したが、それより七年後建長四年二月には時賴は賴嗣を廢して後嵯峨上皇の一の宮宗尊親王を迎へて居、之は鎌倉と道家一門との對立激化が本であるとされて居る。「コレ前將軍賴經京ニテ世ヲミダラントノ企アルヨシ聞エシニヨリテナリ。此月道家薨ズ。コノ人賴經ノ父ナレバウセ給ヒシコト關東ノハカラヒシヤトイフ。二條家ノ說ニハ道家北條ヲウラミ世ヲミダサントセシヲ良實ツネニイサメラレシカバ父子ムツマジカラザリシトイフ。」

さて禪師の鎌倉滯在は寶治元年八月より二年二月迄であるから、正に後嵯峨立帝に依り幕府對道家一門の關係惡化の表に出てより六年以後であり、又其惡化の頂點に達した宗尊親王の下向より六年以前である。之に依つて見るに、時賴の禪師拜請が時の政治的情勢と微妙な聯關に在ることは想察するも無理でなからう。卽ち道家一門との關係惡化

と共に時頼の眼は從來之と對立的關係に在つた久我一門との接近に注がれ、その一つのあらはれとして此拜請の事實を生んだと見るべきではなからうか。久我一門への接近といふ此方針が異常の執心を以て逐はれて行つたことは、此道家一門の反鎌倉的策動により當時の鎌倉騒然たる有樣にあり、重大危機を孕んで居たことに、よく示されて居る。寛元四年時頼執權となるや頼經に近習たりし越後守光時（泰時の弟名越朝時の子）陰謀あり（頼經之に依り歸洛せしか）、寶治元年六月（禪師鎌倉到著二ヶ月前である）には之も頼經に長く親近せし三浦光村の亂がある。更に建長三年に及んでも了行法師、矢作左衛門尉、長久連等の反逆を見、それより宗尊親王の下向、道家の逝去となるのである道家逝去の節などは「奥州（重時）相州（時頼）以下群參、彼の薨御ノ事有レ說等、武家可有籌策之期也云々」（讀史餘論に依る）と記されて居、如何に當時鎌倉が緊張の中にあつたかゞ想像されるのである。

又久我一門への接近の狀を傍證するものとして宗尊親王鎌倉下向の際の供奉の顔振れを擧げることができる。吾妻鏡に依れば一條局（大納言通房女）、西御方（土御門內大臣通親公女）、土御門宰相中將（顯方卿布衣）、波多野出雲前司義重等が擧げられて居り、殆んど久我の一統である。此中顯方卿の如きは單に下向の際の供奉たりしに止らず、其儘鎌倉に居殘つてゐる。之を見ても久我家と鎌倉との關係が益々親密になつたことが知られるのである。

そこで問題になるのは、斯る政治的情勢下に於ける時頼の禪師拜請が、果して時頼一個の胸奥からでたのであるか、それとも他の何人かの献策、慫慂にでたものであるか、又何れにしても時頼に禪師に關する知識を與へた者は誰であつたらうかといふことである。此についてははつきりした斷言はできないが余は禪師入越の動機を作つた波多野義重が此處にも亦介在することを信じたいと思ふ者である。吾妻鏡に依れば波多野義重は極めて朴訥剛毅の武人であつたらしい。承久役に敵矢を受け一眼を失つたが、斯く「一眼の仁」たりしがため或年八幡宮放生會將軍家御出の儀に先

陣隨兵の筆頭となりし所次筆に忌避せられたのを怒り大政所で大聲叱呼相手を辟易せしめた程の一徹者である。其故禪師への歸依も極めて篤かつたのだと思はれる。元來久我家とは、京都六波羅滯在中より特別の緣故ができたが、前述の如く宗尊親王下向の供奉にも加はつて居るのであるが、時賴の此禪師拜請にも關係あるらしきことは、禪師鎌倉滯在と時を同じうし義重も亦鎌倉に在りし事實より推せらるゝのである。前述の「一眼の仁」事件は寶治元年十一月十五日のことである。猶又久我家との間に密接な關係があつたものと假定する時、此義重の介在の背後には久我一門の希望や運動も存しては居なかつたかと考へられる。後嵯峨帝の卽位以來再び一門の活躍を見るに至つた久我家としては、一族出身の禪師の後援にも力を入れたに違ひない。後建長二年紫衣を賜つた時の上皇がやはり後嵯峨であつて、時に太政大臣通忠、權大納言通行、同顯定、權中納言通成、同雅光、參議顯良、右近衛中將雅忠皆一門であつたのを見るべきである。

四

以上のやうな背景の下に時賴は禪師を拜請したのである。久我家と將軍家と必ずしも一でないが兩者が政治的に互に接近を欲して居た時、接近の媒介となる者は兩者何れにも賴もしき存在であつたに違ひない。況んや其媒介は新興の佛法を代表する禪師の如き偉大なる出家人たるに於いて然りである。政治を離れた偉大な存在を介して政治的の要求をも滿しうることは誠に安全にして且つ一擧兩得的な願ふてもない方途である。時賴の心が動いたのも無理もない。併し元來が世俗人にして寶治元年には猶二十一歳の若冠に過ぎざる時賴であるから、時に未熟底のところを暴露することもあつた違ひない。久我家の出といふので、親しみが加はり、時に政治の問題に觸れては、其根本義よりも枝葉の實際問題に亘り、理想家たる禪師の研ぎすました理性を悲しませたこともあるのではあるまいか。禪師が或は和

歌に高遠なる思想を托され、或は修因感果の理を説いて塵世の超脱を勸め、或は國體に觸れて大政奉還を諷せらるゝやうなことがあつても、其が彼の時の心境にぴたりと來ず、從つて禪師も物足らぬ思ひをせられたこともあつたであらう。上述の背景に對し、轉じて禪師のひたむきに純一な佛法を考へる時我等は、其間に大きな精神的距離の存在したことを假定しうるやうに思ふ。

猶最後に間接に關聯あることゝして一言附加へて置きたいのは、禪師が滯在せられた名越の白衣舍が何人の邸であつたらうかといふことである。單純に時賴の邸と考へてゐる人もあるやうであるが、余は吾妻鏡の諸記事より推斷して恐らくは北條時章（前述賴經の近習にして寛元四年陰謀あり伊豆に流された光時の弟。卽ち泰時の弟朝時の二男）の邸であつたと思ふ。朝時の邸は名越に在り、其を子光時に讓つたが、光時流罪後弟時章之を繼いだものと推せられる。吾妻鏡寶治元年十二月五日の頃に「名越尾張前司邊人家數十宇燒亡云々」とあり、同二十九日の頃にも「名越尾張前司」の名が見ゆる。然るに寶治二年九月七日の頃には「尾張前司時章朝臣」とあり、之に依つて所謂名越の白衣舍は恐らく時章の邸であつたと思ふのである。久我家にとつては政敵たりし道家一門の出たりし將軍賴經と關係深かりし反逆人光時の邸に、まだその噂も新しかつたであらう僅かに一年と二ケ月の後滯在せられたとすれば、之は奇因緣であるが其も亦政治的な何物かを示唆してゐるやうにも思はれる。――昭和十四年十一月十四日稿――